

須大拏本生譚の傳播

—— 大谷文書 5791A 「須大拏太子讚（擬）」を中心に*

高井龍

序

二〇世紀初頭、大谷探検隊が西域にて収集した文書群は、現在までに数多くの研究が進められており、『大谷文書集成』全四巻（法藏館、1984年～2010年）の刊行の他、碎片の同定作業もまとまった成果が出されている¹。しかし、なお仔細な検討を要する文献があることも事実であろう。そのような文献の一つが大谷文書 5791A 「「恨嬢嬢由來知」變文斷片」²である。当該寫本は、現在『大谷文書集成』第三巻に道教關係文獻として收められているが、以下の考察で明らかにするように、道教文獻や變文文獻ではなく、讚文の斷片、または讚文を書き換えた文學的な文獻の斷片である。本稿では、敦煌文獻や關連する佛教經典との比較考察を通して、大谷文書 5791A の内容を明らかにし、その資料的意義を考えたい。

第一章では、大谷文書 5791 の圖像と翻刻を提示し、敦煌文獻「小少黃宮養讚」との關係を探る。第二章では、大谷文書 5791A の内容と『太子須大拏經』との關係を考察し、併せて前者の概ねの内容を明らかにする。該寫本が小斷片であるた

*本稿は、龍谷大學佛教文化研究所 2017 年度第 9 回研究談話會「唐代の社會と文化」（2017 年 12 月 2 日：龍谷大學大宮學舍清風館共同研究室 1・2）並びに「中日敦煌寫本文獻研討會」（2018 年 9 月 16 日：浙江大學紫金港校區南華園）の發表原稿に加筆補訂を施したものである。「唐代の社會と文化」では、司會の岩尾一史先生（龍谷大學）をはじめ、富谷至先生（龍谷大學）、村岡倫先生（龍谷大學）、中田裕子先生（龍谷大學）より御教示を賜り、「中日敦煌寫本文獻研討會」では、高田時雄先生（復旦大學）と玄幸子先生（關西大學）より御教示を賜った。また、2018 年 6 月には龍谷大學大宮圖書館より大谷文書 5791 の實見調査の機を頂いた。ここに厚く謝意を表す。

¹都築晶子（代表）「大谷文書の整理と研究」『佛教文化研究所紀要』第 44 集、2005 年、81-270 頁。都築晶子（代表）「大谷文書中の漢語資料の研究：『大谷文書集成』IV にむけて」『佛教文化研究所紀要』第 46 集、2007 年、1-118 頁。都築晶子（代表）「大谷文書の比較研究：旅順博物館蔵トルファン出土文書を中心に」『佛教文化研究所紀要』第 49 集、2010 年、15-97 頁。

²小田義久責任編集『大谷文書集成』第三巻（龍谷大學佛教文化研究所編龍谷大學善本叢書 23）、法藏館、2003 年、圖版 57、釋文 196-197 頁。

め、内容の理解に困難を伴う箇所もあるが、本考察を通して、該寫本に「須大拏太子讚（擬）」との擬題を冠する卑見の根拠を提示する。第三章では、須大拏故事を記した敦煌文獻「須大拏太子因緣（擬）」との関連を探るとともに、敦煌文獻における讚文の利用方法から、「小少黃宮養讚」と「須大拏太子讚（擬）」の流布の一端を探りたい。なお、本稿掲載圖像は、いずれも國際敦煌プロジェクト公開畫像による³。

第一章 大谷文書 5791A と敦煌文獻「小少黃宮養讚」

まず、大谷文書 5791 の圖像と翻刻を提示する。圖像に見られる寫本上の朱點はいずれも句點で表す。なお、Recto と Verso の人物畫との関係は見出せない。

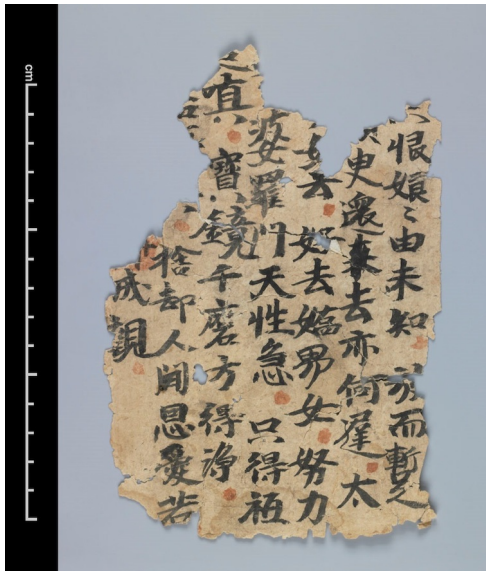


圖 1 大谷文書 5791A (Recto)



圖 2 大谷文書 5791B (Verso)

大谷文書 5791A

- 1.] 𠄎恨孃孃由(猶)未知。放而(兒)暫
- 2.] 須與還去亦何遲。太
- 3.] □□云。好去嬌男女。努力
- 4.] 婆羅門天性急。只得祇
- 5.] □嗔。寶鏡千磨方得淨。

³<http://idp.bl.uk/> (最終アクセス 2018 年 12 月 15 日。)

6.] □□□。捨卻人間恩愛若（苦）。

7.] □成親。⁴

當該寫本に關する先行研究は、管見の限り見當たらぬ。また、當該寫本と完全に内容を同じくする文獻も知られていない。しかし、その一部を同じくする文獻が、敦煌文獻中に確認された。それが、「小少黃宮養讚」である。この讚文は、釋迦がかつて須大拏と呼ばれる太子であった頃、あらゆる布施を實踐して功德を積んだという内容であり、『太子須大拏經』（『大正藏』第三卷所收）を主たる出典とする。『太子須大拏經』の具體的な内容については次章で取り上げることとし、ここでは大谷文書 5791A の内容の理解にあたり、「小少黃宮養讚」を見ていくこととする。

「小少黃宮養讚」は、敦煌文獻中に四點の寫本（S.1497、S.6923V、P.4785、Dx2175）が確認される⁵。いずれも字句の脱誤が散見されるとはいえ、同一内容と言い得る（本稿附録参照）。それは、「小少黃宮養讚」が一定の形を整えた讚文として認知され、また流布していたことを示している。以下、従來の校訂の成果を踏まえ⁶、S.1497「小少黃宮養讚」の翻刻を提示する。大谷文書 5791A と一致する箇所を下線を引くとともに、大谷文書 5791A では寫本缺損箇所であるものの、本來該當する文字があったと推定される箇所には破線を引く。

S.1497 「小少黃宮養讚」

17. (且須亂草似一束。好住孃。) 父母言。小少黃宮養讚
18. 小小黃宮養，萬事未曾知。饑 [亦] 不曾受，渴亦未 [受] 之 (持)。妹答：
19. 我今隨順歌歌 (哥哥) 意，只恨孃孃猶未之 (知)。放兒暫見孃孃面，須與還
20. 卻 (去) 亦何之 (遲)。父言：羅睺一心成聖果，莫學五逆墮阿蛇 (鼻)。
21. 生 [生] 莫祖 (做) 冤家子，世世長爲僂□ (繞膝) 兒。父①言：我今爲宿時 (持)，
22. 不用見夫人。夫人心體軟，母子最爲親。兒答：
23. 我今作何罪，今日受衆 (種) ②苦。我是公王種，須之 (知) 作奴婢③。
24. 父言：來日見男女，啼哭苦身 (申) 陳。我心不許 (喜) 見，退卻

⁴この翻刻については、實見調査の結果、第6行目の文末には朱點が打たれていることが分かった。よって、「捨卻人間恩愛若（苦）」は七言句となる。また、7行目の最後の字は、内側に折れ込んだ部分を開き、「親」字であることを確かめた。

⁵林仁昱『敦煌佛教歌曲之研究』（法藏文庫 89）、佛光山文教基金會、2003年。

⁶任半塘編『敦煌歌辭總編』、上海古籍出版社、1987年、786-800頁。項楚『敦煌歌辭總編匡補』、巴蜀書社、2000年、88-92頁。張錫厚主編『全敦煌詩』第14冊、作家出版社、2006年、6685-6692頁。

25. 菩提恩（因）。父④言：世間恩愛相纏縛，父兒男女皆暫時。一
26. 似路傍逢樹著（相逢樹），須與不免稿分離。父（兒）言：身體黑如膝（漆），
27. 面上三殊淚。目傷清（復青）面皺，唇哆耳屍陋⑤。父⑥言：一歲二歲耶孃養，
28. 三歲四歲弄嬰孩。五歲六歲能人言，七歲八歲便（辨）東西。父⑦言：
29. 一切恩愛有離別，一切江河有苦（枯）竭。拏如拏延好伏士（侍）婆羅
30. 門，莫交婆羅門一日嗔。兒言：鳥鵲群飛爲（唯）失伴，男
31. 女恩愛暫時間。拏如拏延救（好）伏士（侍）婆羅門，早萬（晚）卻
32. 見父孃面。佛子。（樂入山讚）

【注】（原卷 S.1497、甲卷 S.6923）

- ①「父」，原卷作「父母」，甲卷作「父」，茲據甲卷改。
- ②原卷「苦」上衍「衆」字。
- ③「我今作何罪，今日受衆（種）苦。我是公王種，須之（知）作奴婢。」『太子須大拏經』「（兩兒言……高井補）我宿命有何罪，今復遭值此苦？乃以國王種，爲人作奴婢。」向父悔過。從是因緣，罪滅福生，世世莫復值是。」⁷
- ④原卷「父」上衍「一」字。
- ⑤「身體黑如膝（漆），面上三殊淚。目傷清（復青）面皺，唇哆耳屍陋。」
『太子須大拏經』「時鳩留國有一貧窮婆羅門，年四十乃取婦。婦大端正。婆羅門有十二醜，身體黑如漆，面上三顛，鼻正匾匾，兩目復青，面皺唇哆。」⁸
- ⑥同①。
- ⑦同①。

この翻刻より、「小少黃宮養讚」の一部が大谷文書 5791A に一致することが分かる。その一方、大谷文書 5791A 第 3 行目以降の文句の多くは「小少黃宮養讚」に一致せず、また「小少黃宮養讚」の後半の内容も大谷文書 5791A に確認されない。先述の如く、「小少黃宮養讚」の四點の寫本は内容を同じくするものであることから、大谷文書 5791A はそれとは異なる文獻として位置づけるべきとなろう。

ところで、上掲翻刻からは、兩文獻の完全には同一でない文句の中にも、幾つかの語句が一致していることが読み取れる。大谷文書 5791A にある「婆羅門」（第 4 行目）、「嗔」（第 5 行目）、「恩愛」（第 6 行目）という三つの語句は、「小少黃宮養讚」にも確認されるものである。特に、「婆羅門」と「恩愛」は複数回確認され

⁷ 『大正藏』第 3 卷 422b。

⁸ 『大正藏』第 3 卷 421b。

る。「只恨孃孃猶未知。放兒暫（見孃孃面、）須與還卻亦何遲。」という句が一致していることと、複数の語句の一致が認められることを併せ考えるならば、我々は、大谷文書 5791A 第 3 行目以降の内容も、やはり須大拏の故事を扱った内容であると考えて良いであろう。

以上の理解をもとに、次章では大谷文書 5791A の内容を具体的に読み解いていきたい。

第二章 大谷文書 5791A の内容

上述の如く、大谷文書 5791A には、「小少黄宮養讚」に確認されない文句がある。しかし、「小少黄宮養讚」の出典である『太子須大拏經』との間に関連が見出されるならば、大谷文書 5791A と「小少黄宮養讚」との類似点や相違点も新たに指摘できると考えられる。よって、ここでは大谷文書 5791A と『太子須大拏經』との関係を見ていくこととする。以下、該經の梗概である。

葉波國の王子・須大拏は、若くして布施を好む人物であった。成長してからは、曼坻という名の女性を娶り、一男一女を設けた。ある日、須大拏が多くの人々に布施することを聞き及んだ敵國の八人の道士が、葉波國の大切な白象を求めると、須大拏は父王の許可なく與えてしまう。この事件のため、須大拏は城から追放され、十二年間檀特山で妻と二人の子供と過ごすよう言い渡された。その後、鳩留國の婆羅門が須大拏の二兒を譲り受けようと須大拏のもとへやって来る。須大拏は、その婆羅門の求めに應じて二兒を與える。その後、天王釋が婆羅門に化して須大拏のもとへやって来て曼坻を求めると、須大拏は曼坻をも與える。天王釋は須大拏の布施の心に感動し、曼坻を須大拏に還すとともに、婆羅門に連れて行かれた二兒を葉波國王のもとに戻し、須大拏と曼坻も國に歸るに至った。最後に、この須大拏が今の釋迦であることを明らかにし、これまで無數央劫にわたって布施を行ってきたと述べる。

以上の梗概に基づけば、「小少黄宮養讚」は、須大拏が妻と二兒とともに檀特山へ移って以降の内容を主題としていることが分かる。この点を踏まえて大谷文書 5791A の内容を考えるに、第 1 句目と第 2 句目が、婆羅門に連れられていく二兒が母に會うことを請う場面であると分かる。よって、第 3 行目以降はそれ以降の

場面と推定されよう。それでは、第3行目以降の残存部分と『太子須大拏經』とはいかに関連するのであろうか。それぞれの句を見ていこう。

(1) 大谷文書 5791A 第3行目「好去嬌男女。」

まず、「好去」は、唐代口語語彙の一つであり、別れの挨拶言葉である。ここでは、須大拏が二兒に別れを告げる言葉として使われている。『太子須大拏經』には唐代口語語彙は見られぬものの、類似の場面は以下のように確認される。

太子呼兩兒言：「婆羅門遠來乞汝。我已許之。汝便隨去。」兩兒走入父腋下淚出，且言：「我數見婆羅門，未嘗見是輩。此非婆羅門，爲是鬼耳。」（……中略……）便啼哭號泣愁憂。太子言：「我已許之。何從得止？是婆羅門耳，非是鬼也。終不噉汝。汝便逐去。」⁹

須大拏は、婆羅門に二兒を與える決意をするが、二兒は婆羅門について行くことを拒否する。須大拏はそれでも彼らに婆羅門について行くよう告げた。これは、次の「婆羅門天性急。」の場面にも繋がる内容である。

(2) 大谷文書 5791A 第4行目「婆羅門天性急。」

『太子須大拏經』中に、婆羅門が「天性急」であると述べる箇所を探ると、婆羅門に連れて行かれることを二兒が拒む以下の場面が当たる。

婆羅門言：「我欲發去，恐其母來，便不復得去。卿持善心與我，母來即敗卿善意。」太子報言：「我從生已來布施未嘗有悔也。」太子即以水澡婆羅門手，牽兩兒授與之。¹⁰

實は、この經文は、上掲(1)第3行目「好去嬌男女。」の考察中に引用した經文に直接接續する。婆羅門は、曼坻が戻って来て二兒と再會するならば、最早二兒を連れて行くことができなくなるのではないかと危惧し、速やかに二兒を連れて行くことを須大拏に請い、それが認められるという内容である。「天性急」は、この時の婆羅門を描寫する文句として解釋できるだろう。

⁹ 『大正藏』第3卷422a。

¹⁰ 同上。

(3) 大谷文書 5791A 第 5 行目「寶鏡千磨方得淨。」

この句は『太子須大拏經』に該当する箇所が見出されない。これは、寶鏡が繰り返し磨かれることによって初めて明瞭に物を映すことができる、という意味である。恐らく、須大拏が繰り返し布施を行うことによって無上平等道意を發すことができたという『太子須大拏經』の本旨に關わるものであろう。

梗概にも示した通り、須大拏は元來多く布施を行う人物であり、その過度な布施のために十二年間に亙る追放を命ぜられたのである。しかし、彼にとって、あらゆる布施を行うことは前世からの因縁であったため、妻子を婆羅門や天王釋に施與することさえ辭さなかった。「寶鏡千磨方得淨。」という文句に直接關連する文句は『太子須大拏經』に見当たらないが、『太子須大拏經』の結末部分には、内容上關連する文句が確認される。

勤苦如は無央數劫，作善亦無央數劫。當持是經典，爲諸沙門一切說之。
菩薩行壇波羅蜜，布施如是。¹¹

『太子須大拏經』は、釋迦が前世において一切を布施したと説く本生譚である。その中で、幾度も繰り返し行うことが推奨される行爲は布施以外にない。よって、「寶鏡千磨方得淨。」という句は布施との關連において解釋されるものと考えられる。

(4) 大谷文書 5791A 第 6 行目「捨卻人間恩愛若（苦）」

この句は『太子須大拏經』に完全に一致する箇所を見出せないものの、須大拏と二兒との離別の場面が内容上近いものと考えられる。

太子即以水澡婆羅門手，牽兩兒授與之，地爲震動。兩兒不肯隨去，還至父前長跪，謂父言：「我宿命有何罪，今復遭值此苦，乃以國王種，爲人作奴婢？」向父悔過，從是因緣，罪滅福生，世世莫復值是。太子語兒言：「天下恩愛皆當別離，一切無常何可保守。我得無上平等道時，自當度汝。」¹²

この「天下恩愛皆當別離，一切無常何可保守。」という表現に、第 6 行目「捨卻人間恩愛若（苦）。」との内容上の關連を見出すことは困難ではない。なお、それが「小少黃宮養讚」中の「一切恩愛有離別」、「世間恩愛有離別」、「男女恩愛暫時間」等に近い表現であることも重要である。

¹¹ 『大正藏』第 3 卷 424a。

¹² 『大正藏』第 3 卷 422a。

ここまで、「小少黄宮養讚」には見られず、大谷文書 5791A のみに見られる文句が、『太子須大拏經』のどの場面に関わると考えられるかを見てきた。推測に依拠する部分もあるが、残存する幾つかの語句が、「小少黄宮養讚」のもとになった『太子須大拏經』と一定の関連を有していることが分かる。第3行目以降の須大拏が二兒に別れを告げることや、二兒が母親に辭すことを許可されないこと、須大拏が無上平等道意を發さんとすること、そして人間世界の恩愛を捨て去ることは、第1行目と第2行目の「只恨孃孃猶未知。放兒暫見孃孃面，須與還卻亦何遲。」に続く内容として適切であるだけでなく、大谷文書 5791A が『太子須大拏經』に基づく故事であることを示している。

ここで、大谷文書 5791A の現存部分を、『太子須大拏經』と「小少黄宮養讚」によって補いながら解釋すると、次のようになろう。

まず、二兒は婆羅門に連れて行かれることになったが、母の曼坻がそれを知らぬことを嘆くとともに、母の顔を見んことを願ひ、連れられて行くのが多少遅くなくても良いのではないかと須大拏に訴える（第1、2行目）。續いて、須大拏が愛する二兒に別れを告げる（第3行目）。須大拏は二兒に向かい、婆羅門が“天性急”であるため遅々としてはいけない（第4行目）、私の布施は幾度も繰返し行うことによって完成されるものであり（第5行目）、人間世界の恩愛による苦を捨て去るべき（第6行目）と述べる。

以上の理解をもとに、筆者はこれより大谷文書 5791A に「須大拏太子讚（擬）」との擬題を冠することとする。

なお、「須大拏太子讚（擬）」に年代を特定する記述はないが、その短い残存部分にも唐代の口語語彙が認められる。先に見た第3行目の「好去」の他、兒女を意味する「男女」、母親を意味する「孃孃」等である。これらに着目すれば、まずは當該寫本の内容は唐代に成立したものと見做せるであろう。

次章では、須大拏本生譚の西域における流布を、敦煌文獻「須大拏太子因緣（擬）」と「小少黄宮養讚」の考察を通して明らかにする。そして、「須大拏太子讚（擬）」の文獻としての位置づけを行いたい。

第三章 須大拏本生譚の流布

第一節 敦煌における須大拏本生譚の流布

——「須大拏太子因緣（擬）」と「小少黄宮養讚」

敦煌文獻「須大拏太子因緣（擬）」は、「須大拏太子讚（擬）」に同じく、『太子須大拏經』に基づく須大拏故事を記した文獻であり、ロシア本（Dx285 + Dx2150 +

Dx2167 + Dx2960 + Dx3020 + Dx3123) と北京本 (BD08006) とが確認されている。両者には些かの差異もあるが、概ねの内容は一致する。この文獻が斯界に紹介されたのは、イザベラ・グレヴィッチ氏によるロシア本三點 (Dx2150 + Dx2167 + Dx3123) の紹介を嚆矢とするが、それが廣く知られたのは、『敦煌變文集補編』に新たに補訂された翻刻とグレヴィッチ氏の論考の概要が紹介されたことによる¹³。その後、1997年には黄征氏等による新たな翻刻が提示され¹⁴、1998年には玄幸子氏による新たな三點 (Dx285 + Dx2960 + Dx3020) を加えた考察と『太子須大拏經』との比較考察が進められたとともに¹⁵、グレヴィッチ氏による舊稿の補訂版が發表された¹⁶。2000年以降の主たる研究としては、陳洪氏による北京本の發見¹⁷、張涌泉氏等による北京本の校訂があるとともに¹⁸、須大拏故事の圖像研究と文獻研究をまとめた論考の他¹⁹、戯劇との關連を探る論考等がある²⁰。

さて、現在ロシア本と北京本の二點の「須大拏太子因緣 (擬)」寫本が存在するわけであるが、實は、兩者ともに『太子須大拏經』を書き換えた内容となっているものの、寫本後缺のため、白象の布施による須大拏追放の場面までしか確認されない。つまり、「少小黃宮養讚」や「須大拏太子讚 (擬)」が取り上げている太子の追放後の生活や妻子の布施の部分は残っていないのである。現存二點の寫本に、本來後半部分が有ったか否かは不明であるが、讚文では大いに省かれた前半部分も西域にて流布していたことは指摘できる。

この「須大拏太子因緣 (擬)」の利用の一端を窺うにあたって重要な點が、『太子須大拏經』をいかに書き換えたか、という問題である。既に玄氏の研究において具體的な比較が提示されたように、「須大拏太子因緣 (擬)」は、『太子須大拏經』の文章を多く踏襲し、そこに若干の文章の書き換えを行っている。これは果たし

¹³周紹良・白化文・李鼎霞編、李鼎霞録文、楊寶玉助編『敦煌變文集補編』、北京大學出版社、1989年、83-88頁。白化文「《須大拏太子本生因緣》殘卷校録并解説」『敦煌吐魯番學研究論文集』、漢語大詞典出版社、1990年、288-295頁。

¹⁴黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』、中華書局、1997年、501-506頁。

¹⁵玄幸子「『須大拏太子變文』について」『人文科學研究』第95輯、1998年、1-25頁。

¹⁶Isabella Gurevich, "A Fragment of a pien-wen(?) Related to the Cycle 'On Buddha's Life'", *Sino-Platonic Papers*, Number82, 1998. なお、グレヴィッチ氏は、ロシア本三點の考察を繼續した2012年の論考において、それが變文であるよりも講經文に近い性格のものであると指摘する。Isabella Gurevich, "Dunhuang Manuscripts as Source-material for Studies on the Historical Grammar and Vernacular Literature (bianwen) of the Tang Epoch", in *Dunhuang studies : prospects and problems for the coming second century of research*, Iria Popova and Liu Yi eds., Slavica, 2012, pp. 84-91.

¹⁷陳洪「敦煌須大拏變文殘卷研究」『蘇州大學學報』2004年第2期、59-64頁。

¹⁸張涌泉・張新朋「敦煌寫卷《須大拏太子本生因緣》新校」白化文主編『周紹良先生紀念文集』、北京圖書館出版社、2006年、482-496頁。

¹⁹鄭阿財「經典、圖像與文學：敦煌「須大拏本生」敘事圖像與文學的互文研究」『慶賀饒宗頤先生95華誕敦煌學國際學術研討會論文』、中華書局、2012年、678-695頁。

²⁰喻忠傑「敦煌因緣與佛教戯劇關係述考」『敦煌學輯刊』2017年第1期、119-128頁。

ていかなる目的があるのか。

この問題を考えるにあたって参考になるのが、敦煌文獻 BD03578 である。これは、「歌梨王割截忍辱仙人節節支解緣」「慈力王以血餒五夜叉緣」「鹿野苑先置緣」（いずれも眞題）という三點の本生譚を併記した文獻である。この寫本は、「歌梨王割截忍辱仙人節節支解緣」と「慈力王以血餒五夜叉緣」が『賢愚經』に依拠した内容であるだけでなく、『賢愚經』の本文を敷衍し、より情緒的な膨らみを持つ描寫に書き換えている點に特徴がある²¹。それはまさに、「須大拏太子因緣（擬）」と同じ書き換えを行った文獻なのである。

更に、いずれの文獻も講經を目的とした書き換えや文句が認められることも重要である。BD03578 では、講經を行う僧侶の語りに沿った書き換えが行われている。本来、本生譚の締め括りは、「某是我也。」という表現を以て主人公が釋迦の前世であったことを告げる形式を通例とする。しかし、BD03578 では、いずれの本生譚も「某是釋迦牟尼佛也。」となっており、釋迦の言葉としてではなく、僧侶が講經で語ることを想定した書き換えとなっている。一方の「須大拏太子因緣（擬）」もまた、講經に使用すべく『太子須大拏經』を書き換えられている。ロシア本と北京本のいずれもが、寫本後缺のために、BD03578 に認められる第一人稱の問題を探ることができない。しかし、BD08006

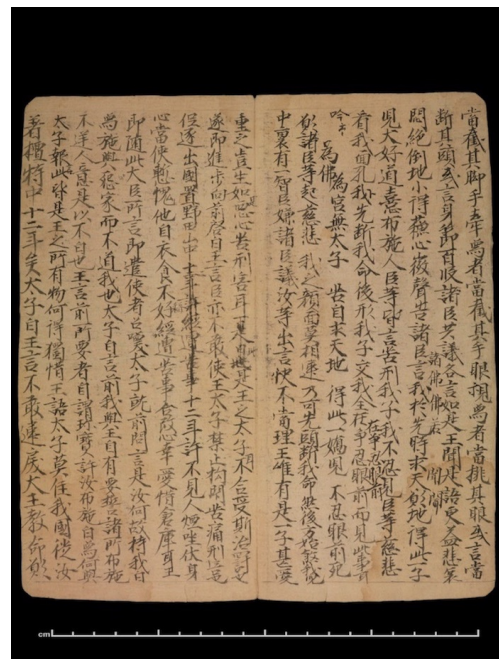


圖 3 BD08006 「須大拏太子因緣（擬）」

には、講經との關係を強く窺わせる「吟云々」という韻文の吟詠を指示する表現が見られる（圖 3 第 6 行目冒頭）。

このように、敦煌の講經においても須大拏故事が利用される文獻であったことが分かるのである。これを踏まえ、次に讚文の利用という角度からも須大拏故事の流布の一端を探ることとしよう。既述の如く、「須大拏太子讚（擬）」は孤本であり、且つ殘存部分が少ないため、その具体的な用途を窺うことは難しい。よって、ここでは「須大拏太子讚（擬）」の藍本となった「小少黃宮養讚」からその特

²¹ 拙稿「敦煌文獻 BD3578 初探——非講唱體緣起類と講經」荒川正晴・柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅——西域古代資料と日本近代佛教』、勉誠出版、2016 年、229-257 頁。

徴を探ることとする。

まず、それぞれの「少小黃宮養讚」の寫本に併記されている内容を見てみよう。

- S.1497
辭道場讚、好住孃讚、(小少黃宮養讚)、樂入山讚
- S.6923V
(少小黃宮養讚)、讚佛功德、文様(四門轉經文、燃燈文、社邑文、印沙佛文、社文、嘆像文、讚功德文)
- P.4785
併記文獻なし。
- Dx2175
(小少黃宮養讚)、佛母讚

これら併記された内容は、「好住孃讚」や「佛母讚」に代表されるように、多くが出家に関わるものである。よって、「少小黃宮養讚」は出家を主題とする文獻と密接な関連を有することが想定される。しかし、ここに問題がないわけではない。須大拏本生譚は、布施行の完成を目指す故事であり、前半部分の十二年間の追放決定までと後半部分の妻子の布施から成るが、そこに見られるのは、布施行の完成のための過程であり、出家ではない。

それでは、何故「少小黃宮養讚」は出家を主題とする讚文と併記されるのだろうか。ここで推測されるのは、須大拏が國から追放され、十二年間に亙って山間に住むという状況が、俗世間との関係を断つという出家に些か近いこと、更に、妻子を布施するという行爲もまた、家族との恩愛を断つ出家に似た行爲であるためではないだろうか。つまり、須大拏の故事は決して出家を主題としてはいないものの、布施行の完成を目指し、出家者に近い試練を乗り越えた人物として位置づけることが可能なのである。ここに、「少小黃宮養讚」の用途の一端を窺うことができる。

また、このような讚文は、決して讚文としてのみ使われるわけではなかったことも押さえておかねばならない。讚文には様々な文體のものがあり、且つ歌唱を伴うことは良く知られているが、本稿では、讚文が単に法會の場で讀誦されるだけでなく、他の儀禮文獻に轉用されたことに着目してみたい。代表例として、龍谷大學藏「悉達太子修道因縁」の冒頭を取り上げる。「悉達太子修道因縁」の故事が始まるのは、第24行目からである。

龍谷大學藏「悉達太子修道因緣」²²

1. 《悉達太子修道因緣》

2. 迦夷爲國淨飯王，悉達太子厭無常。誓求無上菩提路，半夜踰城坐道場。

3. 太子十九遠離宮，夜半騰空越九重。莫怪不辭父王去，修行暫到雪山中。

(……中略……)

14. 武士擁至火坑傍，含涕（啼）淚落數千行。母身一個遭火難，乞惜懷中一子傷。

15. 素手金爐焚保（寶）香，頭面殷（慳）懃禮十方。若是世尊親子息，火坑速爲化清涼。

16. 清淨如來金色身，多劫曾經受苦辛。今日出離三界外，救度衆生無等輪（倫）。

17. 凡因講論法師，便似樂官一般，每事須有調置曲詞。適來先說者，

18. 是《悉達太子押座文》。且看法師解說義段，其魔耶夫人自到王宮，

19. 並無太子，因甚於何處求得太子，後又不戀世俗，堅修苦行？其耶

20. 輪綵女修甚種果，復與太子同爲眷屬（屬），更又羅睺之子，從何

21. 而託生，如何證得真悟，同登正覺？小師略與門徒弟子解

22. 說，總交省知。暫捨火宅，莫喧莫鬧，齊（聞）時應禍（福）。能不能，願

23. 不願？觀世音菩薩，大慈悲菩薩。

24. 昔時，本師釋迦牟尼求菩提緣，於過去無量世尊（時），百〔千〕萬劫，多生波羅奈

(以下略)

第 17 行目と第 18 行目には、「凡そ講論法師は、便ち樂官に似たること一般にして、每事須らく調置曲詞有るべきに因る。適來先に説けるは、是れ《悉達太子押座文》なり。」とあることから、第 2 行目から第 16 行目までが、「悉達太子押座文」と呼ばれる文獻であることが分かる。押座文とは、講經法會の始まる際に、その語りによって座を鎮める役割を負うものである²³。しかし、この押座文と同じ内容が書寫された BD06780 では、「悉達太子押座文」ではなく「悉達太子讚」と題されており、また P.3645 では「薩埵太子讚」と題されている。つまり「悉達太子押座文」は讚文でもあったのである。それは、押座文と讚文が時に互換可能であったことを意味する²⁴。もちろん、押座文と讚文が、ともに音楽的要素を伴う點で共通することも着目すべき點である。

²²参照：注 14、468-469 頁、475-476 頁。

²³金岡照光「押座考」『東洋大學紀要・文學部篇』第 18 集、1964 年、41-70 頁。荒見泰史『敦煌變文寫本的研究』、中華書局、2010 年、240-281 頁。

²⁴鄭阿財「佛曲偈讚在敦煌講唱文學的運用」『第四屆通俗文學與雅正文學研討會論文集』、國立中興大學中文系、2003 年、637-656 頁。荒見泰史『敦煌講唱文學寫本研究』、中華書局、2010 年、33-37 頁。

このような点からは、讚文は、固定した文獻としてのみ利用されたのではなかったことが明らかになる。これは、讚文の多様な利用を窺わせるものであり、その多様な用途に鑑みれば、「小少黄宮養讚」から「須大拏太子讚（擬）」が異なる文獻として作成されたことが、決して偶然ではなかったと言えるだろう。

第二節 「須大拏太子讚（擬）」の特徴

以上の「須大拏太子因縁（擬）」と「小少黄宮養讚」の考察により、敦煌における須大拏故事の流布の一端を垣間見ることができた。兩文獻は、概ね歸義軍時代のものであろうが、ここで想起されるべきは、當該故事が、インド、西域、中國から日本に至るまで、時代を越えて廣範に流布していたことであり、アジャンター、アマラーヴァティー、ミーラン、キジル、敦煌等において、石窟の壁畫や石刻の題材ともなったことである²⁵。その際には、『太子須大拏經』のみならず、若干の内容の相違のある同話を収めた『六度集經』等、他經に依拠する事例も確認されている。また、キジル石窟の研究においては、一部『太子須大拏經』等に見当たらない場面も描かれた可能性が指摘されている²⁶。更に、近年のイムレ・ガランボス氏等の研究によって、10世紀半ばのアムド地方には、須大拏が追放されていた檀特山があると信じられていたとともに、人々の巡禮の地ともなっていたことが指摘されている²⁷。それを示すのが、中國人の印度巡禮に関わる敦煌文獻（IOL Tib J 310.754）であることから、當時盛んに行われた中國人の印度への巡禮に、須大拏故事の檀特山が繋がる一面を有していたことにもなる。

このような須大拏故事の廣範な流布は、西域を含むアジアの廣範圍にわたって該故事が形を變えながら受容されていた姿を窺わせるものであるとともに、「小少黄宮養讚」から「須大拏太子讚（擬）」が作成されたことを理解する上でも重要な点であろう。

しかし、「須大拏太子讚（擬）」には「小少黄宮養讚」と異なる点もある。敦煌

²⁵松本榮一『燉煌畫の研究：圖像篇』、東方文化學院東京研究所、1937年、255-268頁。熊谷宣夫「大谷ミッション將來の版畫須大拏本生壁畫について」『文化』第20卷第2號、1956年、47-60頁。熊谷宣夫「吐魯番將來版畫「須大拏本生圖」解説」『龍谷大學論集』第351號、1956年、99-101頁。謝振發「北朝中原地區《須大拏本生圖》初探」『國立臺灣大學美術史研究集刊』6期、1999年、1-41頁。小島登茂子「敦煌壁畫のスダーナ太子本生圖—北周・隋代の説話表現の特質について—」『美學美術史研究論集』第17・18號、2000年、1-22頁。

²⁶李靜傑「中原北朝期のサッタ太子とスダーナ太子本生圖」『東京國立博物館研究誌』第580號、2002年、61-89頁。中川原育子「キジル第81窟のスダーナ太子本生壁畫について」『名古屋大學文學部研究論集・史學』57號、2011年、109-129頁。

²⁷Imre Galambos and Sam van Schaik, "The Valley of Dantig and the myth of exile and return", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, volume78, Issue 03, 2015, pp.475-491.

文献中に四點現存する「小少黃宮養讚」は、それだけで『太子須大拏經』の後半部分（檀特山への追放後、須大拏が二兒と妻を婆羅門に布施する場面）が理解できる内容となっている。一方の「須大拏太子讚（擬）」は、殘存部分から推察するに、「小少黃宮養讚」に同じく『太子須大拏經』の後半部分を取り上げているとはいえ、「小少黃宮養讚」に比してかなりの内容が省略されており、それだけでは太子が婆羅門に妻子を布施する該經の概要を理解することは容易でない。だが、このことは卻って『太子須大拏經』の内容が既に一定程度流布しており、細かな説明や描寫がなくとも理解されたことを意味する。そして、極めて簡潔な文言で本生譚を語ることは、それを讀誦したり暗誦したりすることを通して、「小少黃宮養讚」以上に、人々にとって須大拏故事を身近な佛教説話とするとともに、それを廣く浸透させる役割をも擔い得たであろう。この筆者の見解は、P.4785「小少黃宮養讚」の誤寫のあり方にも通じるものである。該寫本には、他の三點に比してより多くの音通による誤寫が認められる。つまりそれは、須大拏故事が口頭傳承によっても傳播したことを窺わせるのである。

小結

本稿は、大谷文書 5791A「須大拏太子讚（擬）」を取り上げ、その内容を明らかにし、併せて須大拏故事の西域における流布について、敦煌文献との比較から若干の考察を行ったものである。以上の理解を踏まえ、最後に「須大拏太子讚（擬）」の資料的問題について述べておきたい。

「須大拏太子讚（擬）」は、「小少黃宮養讚」の一部の文句を轉用した文献であるものの、現在のところ、それが果たして讚文として利用されたことを示す材料は見つかっていない。その一方で、アジアに廣く流布した本生譚が民衆に浸透していく一端を窺わせる資料と言うことはできる。もともと識字能力のない民衆は、様々な佛教因縁譚を學び覚えるにも、視覺的に文字資料によるのではなく、時に僧侶の説法や民話の如き傳承によらざるを得ない。その點、「須大拏太子讚（擬）」の如き簡潔な内容は、容易に暗唱を可能とする利點を有する。儀禮に關わる讚文という文献の書き換えが、須大拏本生譚の流布を擔ったこの問題は、今後中國における本生譚の傳播を考えるにあたって示唆に富むものである。

「須大拏太子讚（擬）」が、傳世文献はおろか、西域出土文献中にも同一文献が確認されないということは、それが孤本であるという點で、極めて貴重な資料であることは間違いない。しかし、それは同時に、資料の位置づけに大きな困難が伴う。大谷文書は具體的な獲得地域が明確でないものが多いが、敦煌にて入手し

た文書が首尾完結した文書である可能性が高いことから²⁸、「須大拏太子讚（擬）」は吐魯番出土文書の一冊として位置づけることになろう。兩地域の文獻の近似性は既に知られている通りであり²⁹、この度の「須大拏太子讚（擬）」と「小少黃宮養讚」との関係もそのような例として位置づけることが可能であると考えられる。

附録 「小少黃宮養讚」寫本 3 點翻刻

【1】 S.6923V³⁰

3. (一切經中戒總影。) 須大拏太子度男女贊 (讚) 父母言：少少黃宮養，萬事
4. 未曾知。饑亦不曾受，渴 [亦] 不受侍 (持)。佛子。妹答兄：我今隨順歌歌 (哥哥) 意，只恨孃孃
5. 猶 (猶) 未知。放如潛 (兒暫) 見孃孃面，須與還去亦何之 (遲)。佛子。父言：羅睺一心成聖果，
6. 莫學善皇 (星) 五逆墮阿鼻。生 [生] 莫祖 (做) 冤家子，世世生爲澆順 (繞膝) 兒。佛子。
7. 父言：我今與 (爲) 宿時 (持)，不用見夫人。夫人心體軟，
8. 母子最爲親。佛子。太子言：我今作何罪，今日受種①苦。我是公主衆 (種)，須
9. 之 (知) 作奴婢。佛子。父言：來日見男女，帝 (啼) 哭苦申陳。我心不許 (喜) 見，退卻菩提
10. 恩 (因)。佛子。父言：世間恩愛有離別，父兒妻子皆潛 (暫) 時。一似路傍相逢樹，
11. 須與不免槁分離。佛子。父言：身體黑如漆，面上 [三] 珠淚，目傷清 (復青) 面皺，唇
12. 咄 (哆) 耳屍醜。佛子。父言：一歲二歲耶孃養，三歲四歲弄英嫵 (嬰孩)。五歲六歲學人言，七
13. 歲八歲便 (辨) 東西。佛子。一切恩愛有別離 (離別)，一切江河祐 (河有) 枯竭。時拏男 [拏] 女好伏仕 (侍) 婆羅門，
14. 莫交婆羅門去一日一夜嗔。佛子。兒言：鳥鵲群飛唯失伴，男女恩愛暫時間，拏延

²⁸參照：吉川小一郎「支那紀行」上原芳太郎編『新西域記』、有光社、1937年。

²⁹小田義久責任編集『大谷文書集成』第一卷 (龍谷大學佛教文化研究所編龍谷大學善本叢書 5)、法藏館、1984年、15頁。

³⁰參照：中國社會科學院歷史研究所・中國敦煌吐魯番學會敦煌古文獻編纂委員會・英國國家圖書館・倫敦大學亞非學院編『英藏敦煌文獻』(漢文佛經以外部分) 第 11 卷、四川人民出版社、1994年、226頁。

15. 拏女救（好）伏仕（侍）婆羅門。早萬（晚）卻見父孃面。（以下略）

①「苦」上衍「種」字。

【2】P.4785

1. 讚。消消（小少）黃金量（宮養），萬事未曾知。饑 [亦] 不 [曾] 受，渴亦未 [受] 知（持）。佛子。我今隨頌（順）歌歌耳（哥哥意），柒（只）恨孃孃
2. 亦（猶）未知。放兒暫見孃孃面，還須益（須與還 [去] 亦）何癡（遲）。羅睺壹心清清過（成聖果），不學五逆獨（墮）
3. 掩兒（阿鼻）。生 [生] 莫則（做）冤家處（子），姓姓生生風順癡（世世長爲繞膝兒）。佛子。我今作何罪，今日受①重（種）苦。我
4. 是君（公）王衆（種），須知今日作奴婢。佛子。來日見男女，亭（啼）哭苦心盡（申陳）。我心不喜見，退卻菩提
5. 恩（因）。佛子。一歲二歲耶孃養，三歲四歲弄亦何（嬰孩）。五歲六歲能言語，七歲八歲便（辨）𠵼 [西] [
6. 佛子。一切江河有苦（枯）竭。一切恩愛有離別。荼煙荼女（拏延拏如）急布施（伏仕）婆羅門，莫交𠵼 [
7. 一日一夜親（嗔）。佛子。唇店（哆）宜秋漏（耳屍陋）。屋田面暮愁（目復青面皺），面上三黃呂（殊淚）。身體黑□ [
8. 押謹非有七（鵲群飛唯失）伴，父兒男女皆暫去（時）。一寺（似）路破尾吹切（傍相逢樹），荼煙荼女（拏延拏如）呂千□ [
9. 我今雨寂時（爲宿持），不膚（喜）[見] 夫人。夫人心體餒（軟），每祖（母子）最爲親。了也。

①「重」上衍「者衆」。

【3】Dx2175³¹（從第 17 行向第 1 行讀）

- 1.] □（晚）卻見父孃面。（佛母讚）
- 2.] 男女恩愛暫時間，拏如拏延

³¹俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所·俄羅斯科學出版社東方文學部·上海古籍出版社編『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻⑨』、上海古籍出版社·俄羅斯科學出版社東方文學部、1996年、62頁。

- 3.] □婆羅門，莫交婆羅門一日嗔。兒言：鳥
- 4.] 答：一切恩愛有離別，一切江河（河）有枯竭。拏
- 5.] 弄嬰孩。五歲六歲學人言：七歲八歲
- 6.] 唇咄（哆）耳屍陋。又母言：一歲二歲耶孃養，
- 7.] 分離。父言：身體黑膝如（如漆），面火（上）三殊淚。目傷清（復青）
- 8.] □妻男皆暫時，一似路傍相逢樹，須與不免□（槁）
- 9.] 許（喜）見，退卻菩提因。父言：世間恩愛相纏縛。父兒
- 10.] 奴婢。佛子。父言：來日見男女，啼哭苦申陳。我今不
- 11.] 何罪，今日受種①苦。我是公王種，須之（知）作
- 12.] 見夫人。夫人心體軟，母子最爲親。佛子。兒答：我
- 13.] 世世長爲澆□（繞膝）兒。又父言：〔
- 14.] 聖②果。莫學善皇（星）五逆墮阿鼻〔
- 15.] 見孃孃面，須與還去亦何知（遲）。佛〔
- 16.] 我今隨□□□意，只□〔
- 17.] 黃宮養□□〔

- ①「苦」上衍「種」字。
- ②「果」上衍「過」。

（作者は龍谷大學世界佛教文化研究センター研究員）